昭和大学歯科病院だより　2021．11月号

通算198号
2021.11.15 発行

昭和大学
SHOWA University

―昭和大学歯科病院の理念―

患者本位の医療
先進医療の推進
良き医療人の育成

発行責任者　病　院　長　馬場 一美
編集責任者　広報委員長　丸岡 靖史
〒145-8515　東京都大田区北千束2－1－1
TEL 03-3787-1151（代表）
ホームページ：https://www.showa-u.ac.jp/SUHD/index.html

口に纏わる話―Part2

口腔リハビリテーション科　診療科長　高橋 浩二

以前、本紙の巻頭言で「口に纏わる話」を掲載したところ歯科医師会の先生方や当院通院中の患者さんから、たいへん好評でしたので（私は外交辞令も素直に受け止めます。）、口に纏わる話―Part2を掲載させていただきます。

漸く日本では収束の兆しが見えてきたCOVID-19、不幸にも命を落とされた方々には心からご冥福を、後遺症で悩む方々には少しでも早いご回復をお祈り申し上げます。

このコロナ災禍のような、たいへんな危機から逃れることを**「虎口を脱する」**というそうですが、一つの危機に続いて地球温暖化に伴う過酷な異常気象や首都圏直下型地震など再び危機に遭遇することを**「虎口を逃れて竜穴に入る」**というそうです。
竜穴に入ることが不可避なことなら、まずは**「口火を切って」**備えたいものです。

さてコロナ災禍ですが、**「病は口より入り、禍は口より出ず」**という諺がコロナを預言したものと錯覚するくらいよく当てはまります。ウィルスを含むエアロゾルが口から入り、生死に関わる肺炎を引き起こすことはまさに**「病は口より」**で、罹患した方とご家族への中傷やワクチン療法に対する風評は**「禍は口より出ず」**そのものではないでしょうか。

災害など非常事態の時ほど**「口は禍の門」**であることを各自が強く意識し、隠忍自重するためにも、平時の時こそ過去の風評被害について、じっくりと腰を据えて、見直すのはいかがでしょうか。

災害に備えることも過去の教訓を学ぶこともエネルギーが必要です。歯科病院で**「健口」**を獲得し、食欲の秋に身を委ねながら秋の味覚を堪能し、エネルギーを補給できたら、あとは**「口あれば京に上る」**の実行です。この諺は口で道を尋ねれば都まで行けるという意味から、その気になれば何でもできるという比喩だそうです。

それでは私らしく結びます。「元気があれば何でもできる！　1，2，3　ダーッ！！」

P1　巻頭言　口に纏わる話―Part2
P2　診療科紹介　口腔リハビリテーション科
P3　歯科治療トピック　矯正歯科
P4　オリンピック・パラリンピック歯科診療報告
　　編集後記

記事見出しの色分けをいたしました。
患者さん向け、医療機関向け、お知らせなど

診療科紹介　口腔リハビリテーション科

口腔リハビリテーション科　診療科長　高橋 浩二

当科は摂食嚥下障害、発音障害、口腔の異常習癖、呼吸障害（閉塞性睡眠時無呼吸）という口腔機能障害の診断と治療に特化した診療科で歯科医師に加え、言語聴覚士、筋機能療法士、歯科衛生士によるチーム医療を行っています。当科のオリジナルの技術や装置を含めた先進的な診療を求め、北海道から九州まで全国から患者さんがいらして下さっています。紹介元も主要な癌専門病院、大学病院など全国的に知名度の高い病院から地域歯科医師会や医師会、養護施設、小学校の言葉の教室など多岐に渡り、いわゆる難治症例の患者さんから学ばせていただく機会も多く、医療人としてはこの上なく素晴らしい環境で毎日全力で診療を行っています。

とくに摂食嚥下障害の診療では1990年に米国で1時間の招待講演で報告した当科の診断技術の一部は90年代に米国で発行された成書で取り上げられ (図１)、現在まで国内外における多くの講演で当科の診断、治療技術の紹介を行っています（図２）。

最近ではコロナ災禍により国内外各地での講演はキャンセルが続きましたが、昨年の12月には台湾の臨床家の先生方の強い要望でNHKの看板番組の一つである「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演された嚥下障害の取り組みで名高い小山珠美氏と二人で4時間の国際オンライン講演会に参加しました。（図３）。

当科の診療は歯科病院内に留まらず、昭和大学頭頸部腫瘍センターでは同センター所属の田下助教をリーダーとして月曜から土曜まで2～4名の体制で治療開始前からセンターの医師を中心とした多職種と密に連携し、術前術後の機能評価、各種装置の製作、周術期管理、機能回復訓練などを行っています。また昭和大学附属烏山病院では火曜日の全日、野末講師が精神疾患患者さんの窒息事故および誤嚥性肺炎の防止のための訓練・指導を行い、昭和大学横浜市北部病院のメンタルケアセンターにおいても同様の訓練・指導を伊原講師をリーダーとした当科スタッフが木曜日に行っています。さらに水曜日には在宅や高齢者施設の摂食嚥下障害患者さんを対象に訪問診療を行ない、各種訓練や嚥下内視鏡検査を実施し、必要に応じて水曜以外の曜日にも訪問診療を行っています。以上、当科は歯科病院内外において至誠一貫を具現化するべく常に全力で診療を展開しています。

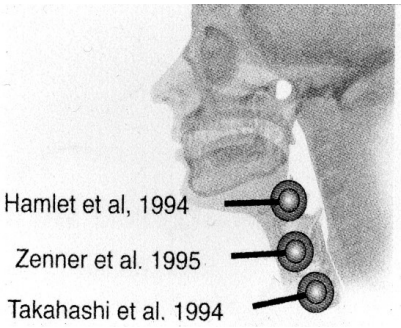

図１　米国の成書で紹介された当科の嚥下障害診断技術（頸部聴診法）

図２　1993年第2回米国嚥下障害学会で海外からの招待講演者として報告

台日攝食吞嚥研討會

吞嚥評估新進展：由床邊檢查到吞嚥攝影

吞嚥障礙評估方式包含儀器評估及床邊臨床檢查，隨著臨床研究發展及醫療場域多元化，評估工具有了更多元的方法；本次研討會特別邀請台灣學者及日本學者，分享從吞嚥評估床邊檢查工具到吞嚥攝影之新發展。首先由臺灣學者孟乃欣醫師介紹電視螢光吞嚥攝影檢（ Videofluoroscopic swallow study）標準化評定方式 MBSImP(TM)（改良式銀劑吞嚥障礙量表）之應用；日本學者昭和大學高橋浩二教授分享頸部聽診法評估，以及由小山珠美分享日本跨職種合作之由口進食跨職種評估工具 KT Balance Chart，歡迎對吞嚥評估議題有興趣之各界人士報名參加。

■日期：2020 年 12 月 04 日(五) 13:30-17:30

■主辦單位：台灣咀嚼吞嚥障礙醫學學會、高齡產業創新發展

■人數：150 位

図３台湾講演のポスター（抜粋）

歯科治療トピック　矯正歯科

矯正歯科　診療科長　槇宏太郎

矯正歯科治療の将来を考える上で大切なことは、先人によって培われてきた専門医療としての矯正歯科の基本を学び継承すること、そして、先進的技術の導入です。しかし、先進的技術にはその光り輝く面ばかりでなく、問題点にもしっかり目を向け、安心・安全な医療を提供することが重要です。

そこで、昭和大学歯科病院　矯正歯科では、既に治療法が確立されているブラケットとワイヤー等を用いた従来の矯正治療を提供すると共に、先進的なデジタル技術の導入を積極的に進めています。デジタル技術を導入して医療の効率化と患者さんのQOL向上を目指しつつ、治療効果が十分に得られない場合は、従来法で改善します。現在、導入しているデジタル技術は以下の通りです。

（１）口腔内スキャナー（IOS ; Intra Oral Scanner）を用いた印象採得（型取り）

（２）矯正移動シミュレーターを用いた歯の移動シミュレーション（図1）

（３）低被爆歯顎顔面用コーンビームCT（CBCT）を用いた三次元的解析（図1）

（４）3Dプリンターを用いた三次元モデルによる診断（図1）

（５）非結紮式ジルコニア製ブラケット『マニューバ』と『アライナー型矯正装置』を併用した矯正歯科治療（図2）

なお、矯正歯科の学術的発展のため、当講座 は2021年11月3日（水・祝）～11月30日（火）開催の第80回日本矯正歯科学会学術大会&第5回国際会議を主幹しました。コロナ禍での開催のため、パシフィコ横浜とWEBのハイブリッド開催とし、11月30日（火）までWEB上で視聴可能となっています。その中で、市民公開講座『安心安全な矯正歯科治療とは？～未来を決めるのはあなた～』と題して動画を配信しています。どなたでも視聴することが可能で、テーマは「透明なマウスピース型矯正装置（アライナー）を用いた矯正歯科治療の注意点」と「矯正歯科治療とは？～小児、学童期の治療について～」です。是非御覧になってください。

※「市民公開講座」は、下記よりご視聴いただけます。

http://square.umin.ac.jp/jos-am/japanese/shimin.html

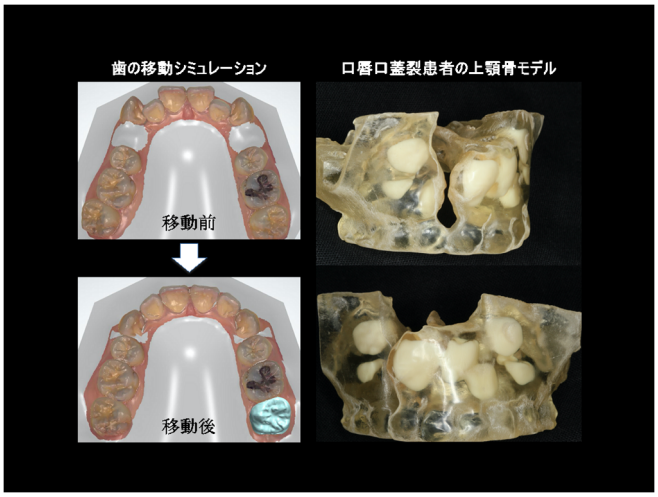

図1)シミュレーションと三次元モデル

図2)マニューバとアライナー型矯正装置

オリンピック・パラリンピック歯科診療報告

地域連携歯科　准教授　田代 三恵

スポーツ観戦好き、国際交流にも興味がある私は、2020年の夏季オリンピック・パラリンピックが東京で開催されると決まった日から何かしらの形で携わりたいと考えており、東京オリンピックには歯科医師として参加させていただきました。

選手村内にあるポリクリニック（いわゆる総合診療所のようなところ）の歯科には最新の診療台、Ｘ線・CT装置が完備され、歯科のコアメンバーの先生を中心に患者さんを各専門領域に振り分け、お互いに連携をとりながら治療を行いました。

当初は選手のみの治療と聞いていましたが、歯科治療の様子をSNSなどにあげている選手も多く、それを見た他の選手や関係者が歯科治療を希望し、完全予約制をとっていましたが、オリンピック開催期間中は朝から夜遅くまで、予約はほぼいっぱいになっている状態でした。

コロナ禍での開催、しかも緊急事態宣言中ということで、不安を抱えながらの始まりでしたが、実際にオリンピックが始まってしまうと、選手村内のポリクリニックのスタッフ、組織員会の方々、歯科のコアメンバーの先生と一丸となって、最高の医療提供を行えたと実感しております。TOKYO2020に携われたこと、そして多くの人と協力しながら、無事に東京オリンピック・パラリンピックが終了できたことに深く感謝をいたします。

ポリクリニック歯科診療室にて

編　集　後　記

深秋の候、 皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

秋から冬にかけては、多くの美味しい食べ物が旬を迎えます。食べることによってセロトニンやドーパミンが分泌されると、幸福感を得られます。しかし、私は食べ過ぎてこれ以上ふくよかにならないよう気を付けたいと思います。

（Y.T）